OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オスロの街の哲学者たち
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 17-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12617
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オスロの街の哲学者たち

寺田俊郎

東京からコペンハーゲン経由でオスロに降りたのは月曜日の夕方だった。同日大阪を発った臨床哲学の同僚たちはまだ宿に着いていなかったので、ホテルの真向かいのカフェでビールを飲みながら待つことにした。夕食どきで賑わっている屋外の席に着くと、向こうにどこかで見た顔が見える。哲学プラクティス学会やソクラティク・ダイアローグ学会で知り合ったイスラエル、オランダ、合衆国の哲学実践家たちだ。再会を喜びあっているうちに、大阪の同僚たちが到着し、その他の学会参加者も合流して、夜更けまで話した。

翌日、郊外にあるオスロ大学のキャンパスで始まった学会では、精力的にプログラムに参加したが、木曜日にはさすがに疲れを感じて、午後のセッションを抜け出し晴天のオスロの街を散策して骨休めをした。私は、主にソクラティク・ダイアローグ（以下ＳＤ）と哲学教育に関する発表やワークショップに参加したが、ここでは４つのセッションに絞って簡単に報告したい。

ベルギーのロッセム(Kristof Van Rossem)は、オランダのダーレン(Wieger Van Dalen)と組んで「ＳＤにおける談話の衝突The Clash of Discourses in Socratic Dialogue」というタイトルでワークショップを行った。タイトルからすれば、ＳＤの途中で対話が座礁したときの対処法をみんなで考えるという、ＳＤのファシリテータ向けのセッションのようだが、実は初心者の入門も兼ねており、簡単なＳＤの歴史と手順の紹介の後、「沈黙を守る方が話すよりもよいのはどんな時か？」という問いを立てて短いＳＤを行うというものあった。目的が複数あるうえ構造が複雑で、しかも参加者の大半はＳＤ未経験者であり、まったくうまくいかなかった。「談話の衝突」というのは、ロッセムが成人教育で実施しているＳＤにおいて、例の提供者がその例のなかでとった行動に対し、参加者の一人が非常に感情的な反応を示したために対話が中断したことを指す。彼はこの経験自体を一つの例として、短いＳＤを行おうとしたのである。なぜこのようなやり方を選んだのか理解に苦しむが、ここで紹介するのは、それなりに学ぶところがあったからである。

ロッセムは、アントワープの教育機関で成人教育の一環としてＳＤを行っている。たとえば、社会教育の専門家が対象

であれば、「社会教育の根底にある価値観と倫理観を明らかにする手段として」ＳＤを行う。目標として次のものが掲げられる。1. できあいの答えを人々に押しつけるのではなく、核心となる問いを問うことを学ぶ。2. 人々の間にある違いを強調することによって対立をひき起こすのではなく、理解を深め向上させる方法を探究することを学ぶ。3. 職業上の行動の根底にある当たり前のこととされている前提を根本的なレベルで問うことを学ぶ。このように、ベルギーをはじめヨーロッパの多くの国々で、ＳＤは公の機関において一定の位置を得、実践されている。

そのロッセムが、ＳＤの理論的根拠に対して疑問を表明することをためらわない。彼がこのワークショップを企画した第一の動機はその疑問にあったように思われる。ＳＤはソクラテスとカントの伝統を継承するものだが、実践を重ねれば重ねるほどその伝統に対する疑問が深まると、ロッセムはいう。人が本当に自分で考えるのはいつか？ 明確に言葉にできる概念からはみ出る思考があるのではないか？ 合意に達するとはどういうことか？ＳＤにおいて感情はどこに位置づけられるか？ そもそも哲学における対話の意義は何か？

ＳＤの創始者ネルゾンは、彼なりの確固とした理論的基盤の上にＳＤを築いたつもりだったが、もはや実情はそうではない。ＳＤはそれを実践する人々の経験に基づいてつくられてきたし、現在も試行錯誤を重ねてつくられつつあるのである。次に紹介するノルウェーのヘレスタッド(Henning Herrestad)の発表も、それをよく表している。

今回の学会の組織委員長でもあるヘレスタッドは、「短いソクラティク・ダイアローグ The Short Socratic Dialogue」と題して、オスロで工夫されたＳＤについて報告した。オスロの実践家たちは、最近オランダから経験豊富なファシリテータを招いて講習を受け、ＳＤを本格的に導入したが、ＳＤは時間がかかり過ぎてクライアントの要求にあわない。そこで、時間を短縮する工夫が必要となる。ヘレスタッドらの出した答えは、「ＳＤの核心は、参加者によって語られた物語りを分析することによって問題を探究することにあり、時間に制約がある時は意思決定や合意は重要ではない」というものだ。ＳＤの目的は、偽なる理解から脱却し真理を探究するというより、理解を豊かにすることにある。物語は概念の分析の手段ではなく、物語が語られることそのことが大切であり、概念の分析はむしろ物語に新たな光を当てる手段である。そして、ＳＤがうまくいったといえるのは、参加者が力づけられた(beempowered)ときである。ＳＤを経験した人々の多くが感じる、物語が語られそれに様々な方向から光が当てられるプロセスの面白さを重視し、その他の面を思いきって削ぎ落とすという提案である。こうして、オスロでは１時間から半日の「短いＳＤ」が行われている。

時間短縮は、ＳＤを哲学プラクティスの一環として実践することを真剣に考える人々には切実な問題であり、質疑では時間短縮の工夫が話題の中心になった。しかし、やはり根本的な問い「ではなぜＳＤなのか？」も問われずにはいなかっ

た。哲学実践家のなかには、ＳＤの可能性についてはじめから否定的な人も少なくない。今回の学会でＳＤ関係の発表が少なかったことや、ドイツのソクラテス者(Sokratiker)たちが一人も参加していなかったことも、その辺りの事情を反映していると思われる。そのようななかでなぜＳＤなのか？　ヘレスタッドの答えは、哲学者とは、人々の間で哲学的に思考すること、思考によって人々を力づけること、共同的思考を促すこと、これらを通じて社会のなかで哲学を実践する者であり、その実践の道具としてＳＤは捨てがたい魅力をもっているというものであった。

さて、合衆国の哲学者で子どもの哲学を実践し、日本語訳された著作も数点あるマシューズ(Garreth Matthews)が全体会の講師として招かれ、「とまどいを抱いて成長すること Growing up With Perplexity」と題して話した。豊富な経験から実例を引きながら、彼が子どもとともに哲学することを心から楽しんでいることが伝わって来るような話ぶりだった。子どもはごく幼いころから哲学的なとまどいを表明するものである。そのとまどいにつきあい一緒に考えることは、おとなにとっても貴重な機会であり、子どもを尊重することでもある。定年退職した今も、マシューズは小学校などで子どもと一緒に哲学しているそうだ。低学年には彼が自分でつくったお話を聞かせることから始めるが、高学年の場合は『ゴルギアス』や『国家』などプラトンの対話編を使うこともあるという。

そのマシューズも参加して、「子どもとともにする哲学」というワークショップが開かれた。合衆国のゲーリング(Sara Goering)がカリフォルニアのロングビーチ学区で行っている哲学教育の活動「学校で哲学を推進するためのセンター CSULB」の報告を行い、討論が行われた。彼女の報告は、哲学教育の「評価assessment/evaluation」に焦点が当てられていた。哲学教育における生徒の達成度を評価することは、行政に哲学教育の成果を認めさせ、哲学教育を継続するために重要である。ゲーリングは、哲学する喜びを実際に感じている生徒を前にすると、評価の必要などないと感じるという。しかし、行政には何かを見せなければならない。すでに冊子として出版されている幾つかの「テスト」が紹介されたことは、いかにも合衆国らしいと感じた。

ゲーリングが哲学教育のメリットとしてあげたのは、①認知的（批判的かつ創造的）な思考の技能、②行動の技能、③哲学的な意識と表現などを向上させることである。①はテキストを読むこと、暗黙の前提を知ること、適切な議論をすること、自分の見解に根拠を与えること、論理的な推論をすること、反例を創作すること、論議の限界を知ること、を含む。②は他の人のいうことをよく深く聴くこと、適切な質問をすること、多様な観点を知ること、他の人の立場で考えること、などを含む。③は、哲学的な問いの「未決着な unsettled」という性質を知ること、哲学と歴史や日常生活とのつながりを知ること、哲学的なものの見方を表現することである。

①と②に顕著に現れているように、基礎学力と市民としての行儀の習得に貢献す

ることに哲学教育の大きなメリットが見い出されている。学校に「飽きている」生徒たちは、哲学の授業で、哲学的な問題を考える仲間がいることを知って喜び、考え、話し、聴くことに「わくわくするbe thrilled」。それを動機として生徒は基礎学力と市民としての行儀を身につける。哲学の授業にそういう側面があることは、確かだろう。そして、そういう側面こそ行政にアピールすることができる好材料だろう。しかし、討論で「行儀よく」させることは哲学の目的ではない、という反論があった。結局、市民としての良識を権威主義的に押しつけることになる、と。私も、哲学の「行儀悪さ」に無自覚であったり、避けたりすることには反対である。しかし、そういう「行儀悪さ」が、「わくわくする」ことにつながり、楽しく考え、話し、聴くうちに、生徒が結果的に「行儀よく」なることも事実である。そういう経験を経ないで身につけられた「行儀よさ」に、私は脆さを感じる。哲学の「行儀悪さ」と市民としての「行儀よさ」は必ずしも矛盾しないと考えるべきではないか。

初日の夕方、オスロの実践家の自宅で歓迎会があった。閑静な住宅地の一角にある普通の住宅だが、庭にバーが開かれ、バンドが演奏し、屋内外に歓談の輪ができた。空はいつまでもほの明るい。私は奥の書斎でオスロの実践家と話した。古い家具が据えられた落ち着いた感じのその書斎で、カウンセリングを行うこともあるという。このオスロの街で、彼らは比較的最近哲学プラクティスを始め、地道に活動している。私は、ＳＤには可能性を感じるが、哲学カウンセリングに対しては懐疑的であると話すと、「どこが違う？」と聞き返された。どちらも対話の一種ではないか、と。なるほど、とも思うが、やはりいろいろ疑問が残る。合衆国の哲学カウンセリングの第一人者マリノフは、すでにニューヨーク市立大学で哲学カウンセリングの講座を開講している。哲学カウンセリングの創始者アーヘンバハもまた、近くベルリンとミラノの大学で哲学カウンセリングの講座を開講するという。いったいどのような教育が行われるのか、たいへん興味深い。

（てらだとしろう）

「子どもとともにする哲学」についての付記

教育に関する臨床哲学の活動は、大阪府立福井高校での授業など、「子どもとともにする哲学」に重なる部分があり、世界の「子どもとともにする哲学」関連のプラクティスには以前から注目している。しかし今回の特集では「子どもとともにする哲学」についてまとめて報告できなかった。そこで寺田報告に付記したい。